首書
源氏物語
横笛
北六

富山県立図書館蔵書

石黒文庫

三十七

○河　才廿二　巻名　横笛の事人ハ[illegible]ぬをむすぶくなりしねをけさせよ

○花　以哥爲巻名詞ハて笛とゝろあり源氏四十九歳の時なる也董三歳也

○細　源氏四十九歳二月ゆゑなるあり柏木巻ハ四十八歳の秋ゆゑ也董三歳白宮三歳ハ[illegible]

○孟　笛と云ハ吹物の惣名也滝字也是と笛とゝろし也笛ハ滝也笛と限て横と吹間横と名付ち

○こ權大納言の　細　柏木逝去なる前巻ゆゑ

ゝ

○こひ恋ひ泣く　孟　柏木ハ可然人なれハ諸人の

なり也

○大ゝさまなりて　細　源氏ハ大ゝさま人なり

なれ心なるふまて柏木ハ一人

のなるなりと也

○いとゆゑ　細　廿三宮のなる也

○ゆゑてゝ　花　去年の二月右衛門督死去ス

先一周忌也　令俗誦經ス

○ようつをちをとうれ　巴按　董の躰也　をの字
わろ〳〵さ也

○心のうちよ又　河　李部王記云天慶十年三月十九日れ八講結願太皇大后れ柏殿参入二時設法華講夕講也令修諷誦調布百端南侍従金百両納瑠璃壺一口　董大将の分ハ柏木大納言の追善と別ハせ〳〵也

○心とちて　細　父大臣董ハ柏木實子なるゆ
ハ歎きてもたり給ハぬ也

○大将の君も　孟　夕霧也

○ぢぶやうどうはせまを
あまふぢうつもちぶうは
いとけるさ沖わりを海を
ものもすぐよいづくあられ
るれば御ちうのちはまを心
ぐしまのてうれ百日を
うんぐらは世をを行ひくら
ぬぐうちもきてでうこ
まうちうびゆすを世うふ
ちのうみもるどをあり
しうひうてれんに
よいとるをあまふの事式文

○〳〵〳〵のまんちう　孟　柏木の兄才ちうり
を廿三宮と夕霧の心よりを行也

○ゆ〳〵うを　孟　致仕大臣も柏木の母うを也

○るさわ〳〵を　巴按　柏木のゆ也

○山のをうとハ　細　朱雀院の心也

○二のゆやを　細　落葉宮也

○入道の宮を　細　廿三宮也

をもこのわどのはちうぐ沖く
うぐしひゆすを行ぐうの事を
うもまちうも沖をうの行を
とぐうをうりひゆすぐうき
と行ぐうもうぐひゆすを行
るまあとうも世の行ゆも
くものうの行ゆのうの事
よいうぐわうしうちうが
こぐうをうを世ぐどゆのを
ハ二のうやもうを人をうの行ち
やうをゆ行ゆるう人をの
うやもこの世の人のうをうを

○為手尺之事　弄　世三宮の尼よ成給ふ也
孟　朱雀院の佛道とつとめ給ふ（八同一道也）

○ことことてて　巴拔　朱雀院うり　世三宮（也
○佛寺のさま　細　仁和寺也
○めき出ぬ　長恭　河尋泉上西遠看筆出林遅
大宮日記云延長六年亭子院ようしゃうなれ給ふ中宮使ようねうの大うちさ給ふ
遊筆未囀鳴鳳管盤根纔點卧龍文　朝詠
詞花　冷泉院へうしゃうなりせ給ふとしうせ給ふ
きう花山院の製　世中よゆうひもなさ竹のよハ
ようつひ弁ととてまうる也　中遍　冷泉院の製
年へうる竹のうしひとうへてもこの世をなうく

うけうれ給ひのまこが為ぐ
まわうばゆがうれどもぐ
この世と為ぐ　為まぐ　世び
給ふ　をうひのかぐるもゆる
ぐうちとそそぐつうあううめ
うどゆがてうこ為ふ
給ひてなかうさうこうを
てもうこどきこ給ふ　仏寺
のうちうきこゆる　ふさ
ゆうたうのうちのひ
ようきうのうのうあぐの
ようきうのうのうあぐの
つきていあうれうれば給ふ

拾遺才十六　春ものへまうのそうつ
やうのうこうもて行りきう世とこの野（よ行きうと
ひそて何ものさもうのうこうひまれハとうかうのう
いくまれハ　賀朝法師　春のうとうのうしむとう
なうハなうふとうひそてうを君　逐一讀人不知
春のよかうく尺きとまうりきう世よとうせき
人ろうあうハ

○世とうれ寄　細　世三宮ハとそてうまうとうく給ハ身
なれハあうう山住まうく給ハとうも後世の無上菩
提の道ハとれ給そとく同一ものとハ後世菩提也
弄　八見道ハ六道父子の道ハ各別心也同ものハ極乗也
○いとうてさうさう　河　地藏本願經曰父子至親收
路各別縱終相逢無肯代受
細　河海地藏本願經とひきう如何是ハ唯佛道の
難解難入の心也いうあう給ハ同也

○らのいとと　河　壘子　又欄子　智　うとうの姿
そて上ハうて桶のうとめとのそうやうるう物也
をさうとうとうくうう也内ハ朱漆外ハ黒漆　細
さなくく葉子まうくとへうく也内藏寮被納之

春の来うう竹の子も育て
の野山うまうもそとどうとれ
どうろうぎううあうあて
行うさうまうどうりうん
世をうう也　今ん行いとうう
とも為ものとうとうきうも給
よいとううきうさゆうんあうと
ゆうう給へうをうるうぐうて人
為うあうどうよゆうぐの人行うり
為まうて為いうるうゆうへうう
給ううどうとうるうゆうと
給うんげうう院のゆうとあうう

○をくのうめもとの細院の四文字は春の山霞
をくらしもれくるかは端書也
河もをくるもめとともろく白菊のをくとく
世をはかなさ我身を　拾遺

○此物語の細ひとつもちらすとなりみさ
はとも也　或抄　源氏の心也

○我さへ　孟　源氏の我さへとをくるるは朱雀院
のをひをくらんとを

大殿つぼいとわるくれまどはるるに
あはれのこちすれをたらん
のこちようるあるとるど海
やうをなつごの夢で変
ものとをとふゆくさ
ふるまきをとばれ
どぞあさぞゆとらんで我
さへをくるの海よりをを
まそいとどうるあるまは
のをとびをとゆくと
ゆとをまげうき
くまひてふるあを

○をくさうへふるもろ花　入道宮の四位をるさ槍
ふくろうめると院の四をんせをを

○品手ハいと　孟　廿三宮の四手跡をくもを

○うさ世よハ哥　廿三宮也　孟　うさ世よあさを
をるめをを世中よあをを不ゆゆーさを
河　拾遺　世中よあをを不ををををを年ゆ
をををををををを
○うををををを　巴秘　朱雀院さをををを
をしををけなを四文よあをを不をあを六条
院ををををんをををを也

○今ハまををを　孟　廿三宮の源氏への四あを
ひの躰也

もびのあやををひををををを
ふをををををの四をを丸を
ををなあをををををををを
ふをよをををををををを
ををををををををををを
ををををををををををを
ををををををををををを
ををををををををををを
ををををををををををを
ををををををををををを

○うちこのやうな　盃　さきをたのるなり也

○ほそをとをくく　巴紗　芝宮とたとよりほそ
をとりなりく伊氏のなりかりもとなりたとほ
今罪とも

○まさいとこるう　細　宮のはさりハたとまり
ほそて後ハ二四よりて伊氏のはさりハ
をとるるそハちひほさる也

○ちきハ　盃　董也

○ほそを　細　伊氏のはの袖也

○うしろの　盃　しろちよりハへの物と着也

○ちろくちひやう　盃　董ハ色白くせいの
ちさる也

○御をもつて　河　楊柳と白色ちくく鴨頭
草花を青き色よりちくくろ共ゝ現量を

○もんのひろう　河　展屑　惣ちて
素和の姿也ち

○ちひ出ちるれと　細　伊氏の四よ柏木ゝ似う
とちりひほ也

○うちのとりん　弄　唐小紋ちく向云唐小文紅袴唐
の織物ちくくさを一巻合歌

○ちのりの袴の袴ぐのまちぐちぐちぐちぐ
りやちまて御身いとちの
ちてちちのちぐちよりまほ
ほちるさ袴ハ御のちれど
いちちちびよちちちびやち
御をもつて　河　楊柳と白色ちくくくくくん
草花を青き色よちくくちくくくん
やちちちの月ちまて
ちちちよちぐちをんやち
ちてちちちちちちちち
ちのびちくよちぐちちち
ちちぐハをちちちちちち

○うもれハ　細　拍木也
孟　拍木ニ似たれとも是ハ是かとよ
ハ　ろうしと
○ハやうと　孟　女三宮ニ也

○我山ニ是かとも　或抄　ことちうとちハ
他人を似ることの

○とあるこしう　河　ろか物語　いあ　ハやうひそ
ひてのとをとをとうとをひてつをこかひハ
ちく君此人をとをとうをれうをうをハをの
をのろや

あるはどれいとをうう
きハをるれをるをうをう
しあをとうぐうこんをもも
よをうぐはうをうをう
りのくをうをとをとうんし
ひをうをしをうどうどの焼
のうびをもうがかうぐをう
きれをかうづうあをうぐ
しひをでうをのうをう
のらうをうをもをうぐを
うてうをあうをうをう
ちうをうをうかどひ

○あをうらうう　孟　乱也　源氏の母也

○うしうのやとハ　孟　うあうと源氏の乳母ひて
あうあうをうを人をををハ幼時ハつきもいを
をうをうのとをひひうう今うをうをうをうを
とあれハ女宮をうとひうをあうひ安ていうと
○女ハや　弄　明石の御腹ハ宮をうも也をうをれうを
細　此董義男をを人をうと
或抄　拍木のうをを不心よりちてやうのをを也

いどおうらうどうやいをうどん
うをうれをうををうをひのを
めをど決をををうをのいをど
うをを者もをいうををを
をうをひをををうをを
てをのををのをてうを
めうををうをうをうどの
をあをををねどをあんうを
のうどうをどうをあをの
ををうをををうきをひを
うををををどうをれを女
りのひをあうをわをうを

○花のさかりハ 河春毎に花のさかりハあるなり
とあひなんるハ今なり
弄 柏木巻に夕霧の此哥と吟せハ同哥なり
心ハなれなれとよハ今しのとうとと思ふ心そ
なりもをひ給也なのさるさ世とちのさう
ハあるへきもれともの給心也

○さうとと 盃 なさあひの義なりくさう

○京をらと 花五月雨れうとなさつ子親袖
のひるものなさそるもき 敦忠集
或抄 くハつるき心也

○つれなもをろ 細 蕓すもれなもをろとハ
なるなる言心也笋とうひ給なる色なるとハ行
まハ姓色とうへきくとうれの給花鳥ハ如何

人世のあてさうなるもき
こうだなるもるんう
あくれなるのくのあひ
するまでハ人とそんとさん
やと花のさうりんあるなる
うりまりやのこ給ぶそれゆ
へくるしきとりえどくも
きあ給なるひづうう
らひあそんとそうるを
つとなぶりりてしづも
うとらひあもし給へばと
あぢひふ給うのこうねて

○さうさ抑と哥 細 柏木のすもうハあれ
ハとをれなきれと也 浮氏の哥也
河古今 今さうるなるあひいそん竹のすれ
うさ抑とあるき世とハをもや
○あてるるうて 弄 笋とと くうなる引取
心をと蕓とと

○さうう 巴抄 さうハしきと言心也
○さひあり 或抄 ひさうとううさひあり
○月日よりへて 細 草子地也

○此さうさ抑 巴抄 柏木のすもう
盃 うさうとの哥ハ行とうをてうるる也
○此人乃 細 浮氏の心也一世るるる宿縁と

○ろくのゆもくせ　弄　源氏も不満足のようあり
と　紫上も野合也又女三宮なども如此の様有と

○あまもとつく　孟　ろひくあまさの中より女三宮と
不足なるなりと

○うくろくさうし　孟　柏木のようゆくよる也

○ろくしつく　弄　柏木女三宮ホの罪也
孟　光ハ物ろくとろとろさてろう罪也

わるよこそハあうをあのゞ
ぐろろうとぐゞうとゞ
ハゆゞうをろこゞうれ所
ようもゆをあるあこ
うあまこつゞくまつる中
よもこのやこそハうるあ
ゆりしまゞゞ人の所ろう
さ所もゆりつるあるあろう
ろてあのくあをうこ
そゞろうさ所てあ見ろ
こゆゞとつをてかん
ろあつこゆうゞくゞ

ろくの四ろて　孟　夕霧の心より女三宮と柏木と
のようハろのうよ推量ろくろあろ也

○今このこちろよ　細　柏木の遺言とあるう
ろくこの心也

ろくこくこのハろひるとゝ物語ハこうるとろるるこ
罪ゆうくうきとゝ世物語ハこうるとろるるこ
いひて書てるとハを畢竟してるこうゞ

おくりけうろるのきこハの
いまこのとゞあるとゞうそ
こをころこひろつよあるひ
つゞろうしこゞこいこゆて
ようりこいきこもゆうこを
ろのころえそゆりいうて
こもあるゞゆくこちつゞ
ここんもこうこいこて
いうこんつゞくこのすろ
こうこうあうこ所もあるこ
みこの人氏ゆりいうこり
こ所をもここうあこんと思

又ろの人氏　孟　柏木のろひへ孫と源氏へ
ゆこんと夕霧のろひころる也

○秋の夕べ　細　秋へうつりそうもう奇妙也
河　春ハ花のひとへよさ〻ハ物の哀ハ秋
そまさまれる

○ゆうぎり　盃　夕霧のまうり給へ

○ゆくゑ　細　樂器なるへし
巴撥　琴なとをもちいて云ふ所也

○むし物ゝう　盃　船息所と夕霧と物ゝう也

○ゆうぎり　花　夕霧のまうは殿上雲井殿の
ゆうぎりよりはるかに多さとの名也
弄　夕霧の三条院のゆう也

○そこなき　河　あらゝものもて池水もそこなき
弁せさのうへとまれとひめやハ
多集　万潛日　まうのとうとう

○むしの者ものさ　細　古今君ゝうへ一村雨
虫ハおのゝ者ものさの〻ゝ歳よりもふる　柏木巻よ
を一条宮のさうしの所所ハ一村雨ものさ〻ゝ
しもるひろうて虫のねうへん秋ハひやう
とあり引合て可見也
律よりへ弄律ハ女ようゝ又秋よりゝ

。ねうるわしう　弄　うつほ物語より此類あり
細　夕霧の心也我身は實法なる面といふ

うるさるし　或抄　夕霧のひさ法也
。こ君の　細　此器は柏木の平生ゆるし給
也柏木の引ひしきの考れる也

。哀いと　盃　夕霧の引也ひしきは者ゑ
也柏木の引ひしきの考れる也

。この御ことのねは　弄　女二宮の御事也柏
木はゆゑ思ひとりつゝめと
。うるさるし　或抄　女二宮の琴をは
て柏木の名残なりしをとゝめきゝ
とる
。ものと絶る　河　後拾遺　うさくらんもと
せそとものをとゝ月日はかりきよる
昔白牙鍾子期とて二人の琴は好友あり鍾
子期死て後今は琴をしらるゝ人なしとて
白牙絃を絶てひかすしる也
細　息面羽也知音をさいるよりて夫妻の
めをとひとをいふ引ひしきをうるとも
。とゝはあるひの河　ものとは法也せそき
るまはるひは手ゝふれとり
。女ものゝ弄　女二宮琴なるをもとり引
ひしきとゝ

。ものゝ　盃　女二宮のもの

とのゐをとうもとりて侍ん
うけ給はりあつてし
ゐとの御ことをそえ
ものゝもりむこの御ことに
あるべのるをそに御ひ
いでゝ給ぶるんなりそ侍
るおんの御まへ御ふ
のゝもとの御ことをもとり
ゆとしるひまもやのる
ぶるうゝぶ御ひを
るんゝあまとしるゝと
あるあ給ぶるまゝ

世のうきつまとて　河　わきてこのとをうるよとて
ながれ世のうきつまとてとひてこそ
細　唯今ハ琴をひくをひとを柏木のなをとひ出
つまとるとくしさて物うきものとて
とて惡者其吟悲しそとよつあて哀とのよ
かをあるれハ出息所の女三宮ハ心をとしハ
てのなをも
○ひとしきりの　細　夕霧の句
○ひとしきりあり　河　ひしきのうきうるあり
世のなをハつきをとうるをとうきも
細　うちもうき物をひとと柏木をとをとて
よハ女三宮をとをとあり
○ひきうるをとうき　細　出息所ハ夕霧引ハとを
めなをとも　弄　堅樂傳精事あり夕霧ハ柏木と
和音のうるをとをいう
○ひとをとうる　河　聽仙樂耳曾明　琵琶引
○ひうつとうる　弄　夕霧の句　柏木とう女三宮よ
つとうるをとうきとうと中のをと河海　和琴ハ二
絃也きを又中をとうとうとも也

まがうるうしなりあるをこがせのうき
つまとうとうとうるうんとなを
あるとをとうとうとうとうとうとの
つまのをとうるとうとうとうとうとう
あるとうるをとうんてをとは
をとうりなをつきをとうをとうとを
をとうとうとうとうとうとうとうとう
とうとうとうとうとうとうとうとう
とうとうとうとうとうとうとうとう
と

○ゆめのかよひぢを　花　夕霧の想夫戀を引て寄
物羽也　ひとりかよふとハ廿二官の心を
也　ゆめ　ゆめ　物やそとハ叫曲を　昔をな
ゐめ　生て　ものやとらんと　物そとうと
て引　物　ゆめ　何　想夫戀　憐イ　平調

○ものてつもさ　花　想夫戀ハ女のうたなハ
引　ものさ　曲也
弄　柏木のうをの物　ものをとち物也

○ものよ　生て哥　花　夕霧のうた　物　ものよ　生て
いなハ想夫戀を引物　心也
細　いなハ　ハ　ものもちとい　ものそ　物
ものと　何　心よハ下ゆく　水の　ものこ　いなて
ものもつ　ものさ　細　樂の　ものと也

○ゆめさとの哥　花　廿二官の返哥也
細　ゆめさとの時　篇よ感　ものと　引
ものと外　心ハ　ものと　ものと外　ハ言よ　生て
ハいものんいなを　ものと　心　ものハ　と

○ゆめさとの　花　是も想夫戀の夕也

○ものやものさまて　盃　廿二官のものあそ　ものの
ものの多き心也
○ものさ　細　夕霧の羽
或拍　想夫戀　ものと引　ものと　ものの也

○むらーのとろも　弄　柏木の巻也

○えとさとる　孟　又ちさとまろんとと

○引とろ　也秘　とろ人廿三宮の心やうとと

○まちかよハ孟正脉ハ又て夕霧の心とろと
かのめろーち也

○こうしのゆとき花人いろーはのとハ廿二宮
の五琴と手ーてろ人ろーるを云人のろ多
るんとてとてきて夕霧の引也
細　草子地也花鳥説如何

○ろくこうとるさ或秘　夕霧引也此色とかの
ーろをハ息不のむーろとまきろーて孔

る秋の夜つーはるんもとて
のとろあやとまもろーてらんは
ろで孔ろめでろるまうこと
まとろーてらんさろ巻
をこの所ろのまろーろーど
まを孔ろんやはたろーるこ
も孔ろめでるれろーろ
めとこそるどまわるわね
ぢーうるわーるそいぢ
こうしの所まきろんゆる
ゆまつでらんわるろうこと
とこるまうこんでうまの

又弄花一説云これをハ息不の引ハ悉皆て今夜
の月りろさよハ夕霧のこりくその物の考もくゆ
ろまんさをいうんろうまきろーてうろを孔
も夕霧の門ハろくハ玉のとまんろーもまさこと
此時ハ感ハろーとまこ命のろやとしあをハさ
とくるんとそゆをとろ物ろハつさも可然ハ
河ハさいとをこるるこまようろをそあハとハ何
を玉のをるまん

○これまるんまろくまる　花　加秀遍山陽日居思紀度
聞隣人吹笛作思旧賦　文選　細ハ息不の引
○うろからこさまよ　花　ろもさまのやとるまあ
とそんハ衰まるろーて孔ろくと

○ハさきのろうまよ　弄　ハさきの声まのろうひて笛
の声のせんをきるろーきと

まこさろうこ孔ハて玉のを安ん
かんろのまそハハとまれハのこうありーと
ろもしーるぬ孔ろーくちん
笛の外とろ物ろーとゆまこう
ていはとろーものよ笛をろん
てもれ孔ろーるんまこと
ろうまこもつころーぐゆ玉
孔ろーどろーるぎてはのろ
ろもこ表ようんこもろをはき
よまかりんろるんこそあーめ
いーーく孔ろーきこ孔ろ
ハまろーこあ孔ろふこ
孔ろんゆれこそ孔ろよこ孔
ぢふこるまこ孔ろ

○ろうろーこハ　花　ハ前の色とハ息不の孔ろ
きて仏合ハ随身とハ夕霧の孔ろく笛と随身
ちてまろ孔ろ心也　也秘　我ハこ分ろこと
○これをまる　細　柏木の秘蔵ろこ物とこと

○ふるゝも　花　これハ古右衛門督の作なり　今
ゆひ出しゝ也　孟　柏木の此笛ハ真實の音と
え吹いさゝと堪能のゆゑなるべき常しくの
作ハ〳〵夕霧の心也

○今ゝ長　或説　まゝの和琴も柏木の手也
作一器也此笛ゝそうと柏木とゆひ作也

○昔と是　河　ひちりとハ琴ゝ又ハ琴ゝ
ハむりの右衛門の督ハ笛の音ゝゆひ作ゝ
細和琴ゝ引一ゝハゆゝされ作ハし此器の音
ハえ吹ゝゝゝ　柏木の作ゝ也

○あるちもさ哥　花　虫の色ゝ笛の音ゝ比也
八雲の比撰ゝゝひゝ色作ゝ　文選笛賦　蜂腰蟻

わゝびつゝゝゝもさゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

○れいろやうゝて　細　雲井雁也

○いまとなれと　河いをとあれといつくさの山の山

あゝさ手のゝわゝやゝをまゝゝゝゝ

くゝまゝゝゝゝ　催馬乗　呂　妹を我

弄　世ゝひゝゝゝ心如何私云唯今雲井雁の恋

ゝゝゝゝれハ妹と我ゝいをとゝゝゝゝ

○こハるゝ　或抄　夕霧の詞

○ゝゝゝゝを　弄　里とゝもゝ殊勝也

○ゝゝゝゝ　細　名残ゝゝゝ心也

ゝゝゝゝゝの月ゝ　或抄　夕霧の詞

河古今ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

○心やゝゝゝ　或抄　雲井雁の心也

きゝくゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

○ゐれよつをそも 或秋 芒宮のうちちらこもさ
ゐやと心りとゐさ也
○えゐりうせん 細 ちらていらくとちらゐ也
○天ちさの世ゐ 弄 ゐちりゐさてゐゐりとちゐ
さゐしゐちゐ

○我門中の 弄 雲井雁と夕霧との中也

○をちうゐひ 弄 夕霧定心うえ惟光ひむもあの
外ハ別の心ゐさよりそ雲井雁のをうえんせく

かたをんさで絶ひくこのうちわうへ
ハ平ひとをくかてかしもこうん
ゐぐいとうちうさちうさかゐ
と心りとゐさ也 細 ちりていらくとちゐ
ゐがいんゐうせん 或人ことをいと
いとおしうべきれ絶ゐこの世
ゐつをてゐうゐうゐ世こと
ハうゐうぐさうわうゐがやゐ
ゐ 我門中のうちをきづちう
やひやうもおていつびいちう
しうう月のかどをうぐうう
めうれゐいうちうをうらて

○笛竹乃哥 弄 柏木夢中ゐりゐ風とハいさえて
吹ゐ也皆風也てゐゐハとハ音律ハ皆色の調ゐ
ついて吹てうゐゐ也そのてくゐハ我てうんと
ありゐ薑ゐてゐうゐ吹ゐのてくゐハ也
○ちゐ花 花世二宮をも後乃ゐへとのゐゐや
細 花島説いく薑のゐ也
○ゐう君の 細 夕霧の心ゐ也

ゐうひ絶ちもちうゐ吹ゐ
ををひうゐとう絶入ゐ
ゐゐの絶ゐ者ゐわうゐ世の
うちきをゐうをうちゐ
てこの笛ををうをうゐ
ゐもうちゐのゐうをの
ちうをゐひをうちゐ
笛竹のうきうゐ風のゐ
ゐ花のうゐうきねゐ
おうちをゐ
ちうんとおうちゐ
ねをひをうゐ

○ぼたんの花　順和名　嗅吐（ツタミ）小児哺乳冷熱不調
今案小児の乳をあるもとる子也

○ふてこそふん　弄　髮と耳ふてこそふてこそいやし
き躰也雲井雁の躰
或抜　夜陰のうちしもをもくさ也

○いとうくこそこそて　細雲井雁也

○ふちハいて　弄　乳の出さる也

○うちもちて　盃　ものさわひしのとひゆうとき散
米をとる也

○うやもやもる　盃雲井雁の羽夕霧のいるるとの
の躰返答也ちうくしきこゝろ出さてとうくさ
なくの躰也

○ふ月ゆてよ河　大さハ月をもやそうれそ
つれハ人の老とるるもの

○うちうちひて　或抜　夕霧也やうの　羽也

おとこぶうもとりおりていら
ずわるがるのうまふうちまき
しもうしうどてかうるがう
きよるのあうれもまぶれあ
ぶうるやもやもよそうあまぶ
ゆうきゆあうきゆあのかぶよ
ゆうきゆあうきゆあのかぶよ
ゆうきゆあうきゆあのかぶよ
ゆうきゆあうきゆあのかぶよ
ゆうきゆあうきゆあのかぶよ
ゆうきゆあうきゆあのかぶよ
ゆうきゆあうきゆあのかぶよ
ゆうきゆあうきゆあのかぶよ
ゆうきゆあうきゆあのかぶよ
ゆうきゆあうきゆあのかぶよ
ゆうきゆあうきゆあのかぶよ
ゆうきゆあうきゆあのかぶよ

○物ゆかしく　或物　思案なく物をいひ居たるさまにて　の居也

○さもとよりのこと　万水　雲井雁也

○出居ひね　細　雲井雁の初

盃　ゑるさへ出あれと夕霧とゝひ出し居也

○ゑろかて　河　煩ナヤミ　万葉

弄　柏木の夢さまてしまうて伏ゑるゝとゝれ居るゝ

あぢきなくこゝろ　或物　柏木の執心とゝめゝる笛ゑれ也

○ゆ（さゝゝゝ　巴物　我ゝ人さゝゝ（さゆゝゝ

○世のゆゝ人　巴物　一条宮ゝ居ゝゝゝゝ也

○今ハのゝゝ　河　臨終一念生死是定　經文

○ゝゝハ　万水　執心のゝ也

○ゝゝゝゝ　河　賀之集　世中心ゝゝく物ゝて常のゝゝゝゝゝゝゝゝゝ公忠朝臣のゝゝ物哥ゝゝ也

あぢきなくこゝろ　或物　思案なく物をいひ居たるさまにて　の居也

○さもとよりのこと　万水　雲井雁也

○出居ひね　細　雲井雁の初

盃　ゑるさへ出あれと夕霧とゝひ出し居也

○ゑろかて　河　煩ナヤミ　万葉

弄　柏木の夢さまてしまうて伏ゑるゝとゝれ居るゝ

○物笛　或物　柏木の執心とゝめゝる笛ゑれ也

○ゆ（さゝゝゝ　巴物　我ゝ人さゝゝ（さゆゝゝ

○世のゆゝ人　巴物　一条宮ゝ居ゝゝゝゝ也

○今ハのゝゝ　河　臨終一念生死是定　經文

○ゝゝハ　万水　執心のゝ也

○ゝゝゝゝ　河　賀之集　世中心ゝゝく物ゝて常のゝゝゝゝゝゝゝゝゝ公忠朝臣のゝゝ物哥ゝゝ也

○佛の道より花　康保四年七月村上天皇六七聖忌
小野宮殿俊諷誦和琴横笛ホ為衆僧布施管三
位諷誦草云有一龍笛蓋希代之名物也云々
細　佛より施入せんもいうと也

○六条院より盃　夕霧の源氏へ参る也

○女院のぬり　弄　明石女院也

○こうこうこう　弄　三宮白宮堂上の女宮をも三
宮をも猫ようよう也夕霧堂上のうへ

○大將とて　細　三宮大將とうひてのる也

○あるうへ　花　八道の宮ぬりとうよりの同一面斜よりま
ゐる　弄　愚案別也明石女院のぬり方より源氏ぬりまゐ
るうへ

○ぬりうこうこう　細　我身ぬりの身をうつ
ゐるのる也

○なとうゐる　或抄　夕霧方の句

○ぬりものうへとハ　弄　堂上のぬりうへ

○いとやうう　弄　夕霧ぬり物をうへとうん物
とのるへ軽とうるへし

○ちうかハ　弄　大將のうかをうへのうるうよう
さんとう

○うとくとて　細　ちうそのる也

○こうこうこう二のうへぬ　花　世若君八重のう也八道宮
のぬりうよ二宮とかうひる也　弄　六条院辰巳の方

紫上也南の殿ハ殿女三宮也その中ハ程の間明石女
院の御方ハ是ハ明石女院のゆゑ〻ての事
河 三宮ハ今上のゆゑ蜻蛉巻に式ハ
○ゆゑ〻しくて 也抄 源氏の愛し給ふ心ゆゑ〻し
○もとのまれ 花 大将の三宮とゝきこゆるをそれを
たゞまのかとゝまれるなり源也

○あゝ大将とや 孟 白宮の夕霧と我りのこの源也
○院もゆゑんして 也抄 源氏也 いとゝうゝさ
源氏の約也
○御かやとの御近さまり 河 近衛大将也随身
を近衛の被官なれハ私の随身をつかも

も三のうへのゆゑ〻しくて
つよまゝ〻つゝてあゝびゝ角を
うけて〻ゝてゝ〻ゝまゝ
ゝ〻ゝゝのまゝのゝ〻ゝゝ
まゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
まゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

常ゝゝゝゝゝ 孟 三宮ハ御兄なれハ也
弄 三歳のゆゑとゝゝゝゝゝゝゝゝ

○三宮ハゝゝゝゝ 或抄 夕霧の約也ゆゑの心ゝ
ゝゝゝゝ用捨ゝゝゝゝ

○ゝゝゝゝゝ 弄 源氏の〻〻〻也

○ゝゝゝゝゝ 或抄 源氏の約也
弄 源氏夕霧のゝゝとの〻〻
○ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

○ぢやのもろ君ハ 弄 女三宮の若君薫のもの也
或抜 薫ハ柏木のもられ宮ゝもの例よハ
ものもものもの也

○母ぢやの乃 或抜 薫と申もの事ハ
女三宮の我心のもぐをもとり給へんと也

○ものれも心のもせよ 也抜 申さあひをもうもうを給
源氏のゆ心也

○大将ハ母君と 盃 夕霧の薫といもうもの八ぢと
のひもうさ必給へるよ花とうてまいりせ
ものもの也 或抜 柏木よ似ものもの下心也

○二あひのもをーひもう 河 二盃直衣 もうをき
てとハ申さるるへと衣裳をハ給さ 整し 直衣
くうをきてと云也 芳 ものもさ染也
花 申さるさ童のもうとうをーとの一也 薫の三歳
もうの時のもの也 弄 同云薫三歳そのもの也
如何一答申さるさ時の直衣ハさうもうさひとへもの也
ものーもちいさき頸紙のへもう物をお神のやうよ
きもうもうもうと云ハ色ハうへれもうをーとうる
きなる心也 万水 三歳のへ直衣を着もうるのうし
宗祇 得図 へもうのーもうよ答云お神のやうるう物
よもひ紙をーてさもうるへうれとうーもうもうの
とうもうもうハ云也

○うもうもうもう 細 夕霧 柏木のもうを心よりもう
ものうもう也

てんとの記ものりもーひで
ものうもうよ花のえうの指て
申ものもうをうて人也ものて
まものもうへだ申もう
もうふうあひのおもものうり
をもていうもうもうひり
もうもうきもがもうもう
もう海やうもおーばもて花ばく
ものもうもうる海やもうもう
もうもうもうひもくもれば申
もうるもうどうもいう海もう
ものもうもう海もうれ

いまうのとうめ　孟　董の柏木は似たる
○なれをまろ　巴拙　まうのまろうしろ心也柏木乃
目つきは似たるなり

○ありしハうまと　孟　源氏もさ思ひやんと
○いまうのゆもしさ　或拙　源氏の宮思ひやりて
えまうのせまうしろ

○岸君いて　孟　董也

○いてあくれ　方水　そと心をあらと羽也夕霧の
董を柏木のまうしろうをもとまうハと
○父物ゝ乃　湘　致仕の大臣也

○まと各のう孟　柏木のまといてくろ月のれ
うと致仕大臣同さの乃ろ

○つんえくまうさ　或拙　柏木のまとうて致仕
大臣よりさせ乃ハつをえんまと
○いていてさハ　華　夕霧の心ろうしろ
巴拙　まうしろ柏木のまうて八あしと
或拙一説　柏木のまうれハとそくろ密まと致仕
のゆゝまりとをまうと

○ゆゝまと　或拙　董のまゝ

どもまのうらめ　孟　董の柏木は似たる
ものろきうどいとうゆ
えはつりいつこのこと
もるやうかるさ海てうろて
うかどうめのうつをる
やわんやうろかるゆ
えまんといよくゆうきゆ
やうろハりひのれさ
けどよつのうつきうど
どもうんとうつよとのこと
いてあるあうど海と
まりげうとんうゆ

ていてあくれ方水そと心をあうと羽也夕霧の
董を柏木のまうしろうをもとまうハと
○父物ゝ乃　湘　致仕の大臣也

○まと各のう孟　柏木のまといてくろ月のれ
うと致仕大臣同さの乃ろ

○つんえくまうさ　或拙　柏木のまとうて致仕
大臣よりさせ乃ハつをえんまと
○いていてさハ　華　夕霧の心ろうしろ
巴拙　まうしろ柏木のまうて八あしと
或拙一説　柏木のまうれハとそくろ密まと致仕
のゆゝまりとをまうと

○ゆゝまと　或拙　董のまゝ

ていてあくれ方水そと心をあうと羽也夕霧の
董を柏木のまうしろうをもとまうハと
○父物ゝ乃　湘　致仕の大臣也

○まと各のう孟　柏木のまといてくろ月のれ
うと致仕大臣同さの乃ろ

○つんえくまうさ　或拙　柏木のまとうて致仕
大臣よりさせ乃ハつをえんまと
○いていてさハ　華　夕霧の心ろうしろ
巴拙　まうしろ柏木のまうて八あしと
或拙一説　柏木のまうれハとそくろ密まと致仕
のゆゝまりとをまうと

○ゆゝまと　或拙　董のまゝ

○ふじのうへ　弄　雲上のくもゐ

○ちうなごんの二条院　細　夕霧源氏（物語あるゐ也

○ちうぐうのあるじ　巴按　廿二宮の御方

○ひかるのきみ　弄　夕霧のとき心とりひろげ

○むかしのゆめ　弄　古さるゆめ（語也

○ものさびしげなるの　弄　源氏の語也　ものさびしげなるの
ことは　想夫戀の心なり　哀なるべきなりけり
〜〜　想夫戀　由来なりやいかに　のもとより
○世はなると　細　夕霧とゝ（ての語也

ゆめ　巴按　想夫戀の曲　廿二宮　ゆめ
はかなし

○ものもとめ　巴按　想夫戀の曲　廿二宮　ゆめ

○ものもとめ　の　盃　柏木と木困なりし心さしを
ゆめ　源氏　廿二宮　心とゝを　源氏の夕霧（教訓也
巴按　柏木の遺言なりしを　ものもとめ
（よろこんなりけり

○ものもとめ　或按　自他心なりさすなり

○さうしの花　巴按　夕霧の　源氏　の　花
さうし　源氏　の　上のすがりとも
くらひ　ゆめ　上のすがりとも

たちのぼるたれか 細 夕霧の語也

ほのぼのとあらの 巴撥 たちとの長き

心ぞとも 花 上の句はたちのぼるの心さしとも
なれとも長きとはいとほ氏君のおもつるを
つきて心ぞとはいとはいとはいとはいとは
しるを心ぞとはいとはいとは云也
細 今絶くるは句へもしろむ〈さしと〉
ものさわがしくは 盃 嫌疑也てくもり切也
さしねんは 弄 夕霧のとわかれよそ列
おもふ〈ぞとそ〉ぞとてわかれてわかれのこは
と〈人よりとよりとをとり〉

ひとしほ 細 牛のとをとをのとをひとは
されはさてもとをとをとをとを
ぞあるとも 細 我身の實法句をよりは
はをはをはをはをはを

たちとぞ 巴撥 面白てよとを〈字行皆夕霧
の句也
いとをとをつけて 花 たちとをとをとを夕霧
の源氏はあをとをとをとをとを也一条の息所の
送り物を笛とをとを後柏木の夢をとをとて寄をと
をとをとをとをとをとを也

てをとをとをとをとをとをとをとをとを
りをとをとをとをとをとをとをとを
をとをとをとをとをとをとをとを
をとをとをとをとをとをとをとを
をとをとをとをとをとをとをとを
をとをとをとをとをとをとをとを
をとをとをとをとをとをとをとを
をとをとをとをとをとをとをとを
をとをとをとをとをとをとをとを
をとをとをとをとをとをとをとを
をとをとをとをとをとをとをとを
をとをとをとをとをとをとをとを
をとをとをとをとをとをとをとを
をとをとをとをとをとをとをとを
をとをとをとをとをとをとをとを

○しらえんのもの　或抄　源氏の心より徹しうつくし
○ものわかるところ　或抄　源氏の心也　董花なるべし
○その笛ハ　花　源氏のうつり給ふ也
細　此笛をとゝひ給へ
○ゆゑハ陽成院の　花　南宮式部卿貞保親王ハ笛
達者也清和の子母二条后陽成院の御母也ゆゑ
紫上の父式部宮よりとゝてうつくしきゆゑ
のうつり給へ
細　桃園なるへし　花鳥ハ紫上父ゆゑ　荷紫上
父ハ此時未薨也故とハつゝましき也
○萩のえん事　桃園にて　萩宴あるへしと心得へし
○母の心ハ　或抄　中息不ハ此笛の由来をしらす給ふ
そ思ひ給ふ事なるへし

○未の世ハ　花　夢の中ハ哥ハ　笛竹ハ映ゆゝ世の
しるすハ未の世なるべきなれ給ふと有しる也
細　源氏の心也
○さやゝか　或抄　柏木ハ董ハとゝまりぬるとゝ
○此君を　細　夕霧も恋ゆゑ　源氏も推し
給ふ也
○その中をしきと　花　見とゝのハ夕霧の心也
○今しもこの　世抄　笛のつゆてよ見ひ出しゝ
やゝうつり給へ
○今ハしるしなし　細　柏木終焉の人をしるべ
夕霧の羽也

○ちゝ〳〵ゐん　孟　柏木の源氏の心意こゝろひろ
とゝろ〳〵と夕霧の源氏にしたゝ〳〵也

○いとゝたゝし　或抄　夕霧のさん氣のつゝみ祥そ
うゝ所〳〵也

○されはゝ　細　源氏の心也されハ夕霧ハ光り所
〳〵　或抄　上の句ハ世君いとゝ物さん
されいとゝひ所〳〵音尾也

○物かやゝして　或抄　源氏も光りゐ祥そ
こゝろ人の　細　源氏の句

四十四　ゆゝしうひよまゝり
て侍るゝ〳〵ん侍のこゝち
いひとゝたゝべゝ〳〵ゐ
ゐん〳〵こゝまゝ〳〵と
ゝとゝくゐ侍〳〵べゝゐる
こゝゐ侍ゐん〳〵ゐゐの人
をゐん〳〵ゐ侍ひ所〳〵侍
ゐゐ〳〵ゐゐ〳〵侍〳〵
ゐゐ〳〵ゐゐ〳〵ゐ
ゐゐ〳〵ゐゐ〳〵ゐ
ゐゐ〳〵ゐゐ〳〵ゐ

○ゐゐ〳〵ゐ　或抄　源氏の句
細　源氏の句

○さて今ゐゐる花　笛のゐとの所て夕霧ハ問
ゐ所ゐるをハきゐゐ〳〵ゐ
こゐゐ〳〵ゐとゐ　河　孫真人云　夜夢不須說
世〳〵のゐ人とハ夢を信ゐゐハ兒戲やゐれゐの
こゐゐ不ゐ
孟　夢をハゐゐ〳〵ゐゐのゐ〳〵ゐゐあれハ也

○ゐゐ出きゐて　孟　ゐゐゐゐゐゐゐゐ源氏の
ゐゐ殘縣ゐゐゐゐゐと夕霧の所〳〵さて〳〵也
く侍ゐゐゐゐと也

○ゐゐ出ゐゐゐ　弄　些式アク作とアクゐ〳〵